

3 万葉集と紀の国



紀伊万葉ネットワーク事務局長

木綿 良介

はじめに 【令和】の時代

新元号「令和」の時代が始まりました。ご存知のように「令和」は万葉集を典拠とし、巻五の梅花の歌三十二首の序にある、「初春**令**月、氣淑風**和**（初春の良い月で空気は美しく、風は和らいでいる）」の部分から取られています。

このことが発表されて以来万葉集が脚光を浴び、再評価される動きが起きていて、万葉集の愛好者が集っている私たちの団体にも喜ばしいことでもあります。また「和歌山」の「和」が入った元号でもあり、本県関係者には新元号が好ましく感じられるでしょう。

本稿は、万葉集と紀の国について述べるものですがまずは新天皇の即位・令和の時代の始まりを寿ぎ、この時代が「和やかで（平和）で美しく・良い（令）」時代であることを願い、さらに当県と万葉集の繋がりが広く理解され、万葉集そのものの息長いファンが増えることに期待したいとの思いが込められています。

以下、（１）紀の国の万葉歌について、（２）紀伊万葉ネットワークについて、述べます。

§ 1 紀の国の万葉歌

和歌山は万葉の古来より自然豊かで風光明媚な地でありました。今から千二、三百年前に天皇の行幸等に際し和歌山を訪れた万葉人は、この地での見聞・体験の感動を万葉集に残る歌で表現しました。その数は100首を超えています。当県は万葉集と縁の深い地なのです。

和歌山（以降「紀の国」と表記）の万葉歌を簡単に紹介します。

詠われている場所は、都のある大和を出て紀の国に入る「橋本」に始まり、紀の川沿いに「かつらぎ」を過ぎ「和歌山」市に至ります。和歌山市から紀南地方までは主として海岸沿いあるいは海に近い地での歌が残されています。代表的と思われる歌、或いは私の好きな万葉歌を挙げながら紀の国を旅していきましょう。

【橋本／真土：大和／紀の国の国境の地。万葉人が紀の国に一步を刻む地】（橋本市）

万葉人はこの地で都の地から異国に足を踏み入れます。見知らぬ国、噂だけは聴いている国、に入る期待や不安があったことでしょう。そんな中で目にする紀の国の美しい山や川、そして後に見ることになる海…、人々の感動が歌から伝わってきます。

○あさもよし 紀人羨しも 亦打山 行き来と

見らむ 紀人羨しも (巻 1-55)

(口訳) 紀の国の人は羨ましいことだよ、行き帰りに真土山をみることができ、紀の国の人が羨ましいよ

注) あさもよし：「紀」にかかる枕詞



橋本市真土の万葉歌碑 (犬養孝揮毫)

○白たへに にほふ真土の ^{やまかわ}山川に 我が馬
なづむ 家恋ふらしも (巻 7-1192)

(口訳) 白い色に映える真土山の山川に私の馬は進むのを躊躇っているよ、家(の妻が私)を恋しがっているのだろうか

注) なづむ：行き悩む

【背山・妹山：畿内(都の圏内)の南限とされ、和歌山に入る難所の一つ】(かつらぎ町)

背山・妹山の歌は万葉集中に 14 首(または 15 首)もあり、富士山の 11 首より多く、この地が有名な歌枕であったことを表しています。ここでは 1 首だけ紹介します。

○これやこの大和にしては 我が恋ふる

紀路にありといふ ^{きぢ}名に負ふ勢能山

(巻 1-35)

(口訳) これがまあ、私が大和にいたときに見たいと恋しがっていた あの有名な背の山

なんだなあ

【和歌浦／加太：万葉の都人が初めて海に出会う地】 (和歌山市)

聖武天皇が行幸で来られた地。海を見たことのない大和・飛鳥の官人は加太・和歌の浦の雄大な海の景観に大きく感動します。旅の疲れもしっかりと癒されたことでしょう。

○若の浦に 潮満ち来れば ^{かた}潟をなみ ^{あしべ}葦辺

をさして ^{たづ}鶴鳴き渡る(巻 6-919 山部赤人)

(口訳) 和歌の浦に潮が満ちてくると 干潟が無くなるので 葦の生えている辺りを目指して 鶴が鳴いて渡っていくことだよ



和歌の浦・片男波 (高津子山からの景観)

注) 潟をなみ：潟(干潟)が無くなるので

○藻刈り舟 沖漕ぎ来らし 妹が島 形見の
浦に 鶴翔る見ゆ (巻 7-1199)

(口訳) 藻を取る船が沖を漕いで来ているらしい、妹が島(友が島)の形見の浦に鶴が飛ぶのが見える

【海南から新宮まで：黒潮に洗われる紀の国の海岸】

天皇の紀伊行幸は斉明、持統、文武(と持統)と3度にわたり白浜への旅をします。

海沿いを歩く、または船で進んだと思われませんが、いずれにしても紀の国の美しい海岸線の景観に驚き・感動しています。

○紫の 名高の浦の 靡き藻の 心は妹に

寄りにしものを (巻 11-2780)

(口訳) (紫で名高い) 名高の浦のなびき藻のように、心は妻になびき寄ってしまったものを

○湯羅の崎 潮干にけらし 白神の 磯の浦
みを あへて漕ぐなり (巻9-1671)

(口訳) 由良の崎は潮が引いているらしい、
白神の磯を波が荒いので頑張って船を漕いで
いるよ

○岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあ
らば またかへり見む (巻2-141 有間皇子)

(口訳) 岩代の浜の 松の枝を結んで無事を
祈る、もし命あって帰ってこられたら、この
松をもう一度見られるなあ

○み熊野の 浦の浜木綿 百重なす 心は思
へど 直に逢はぬかも (巻4-496 柿本人
麻呂)

(口訳) み熊野の浜の浜木綿のように幾重
にも恋しているのに直接は逢えないことだ
なあ



施無畏寺 (栖原海岸) の桜

§ 2 紀伊万葉ネットワーク

・団体概要

2007年に県内で活動していた万葉愛好家のグループが連携してネットワーク活動を行おうと合同し、初代会長に吉田昌生氏(藤白神社宮司・当時)を事務局長に木村哲也氏を選び、村瀬憲夫氏、永廣禎夫氏などの参加を得て発足。活動趣旨は、万葉集を楽しみたい、万葉集とゆかりの深い和歌山の地の良さを広く知って欲しいというもの。

現在の登録・活動メンバーは20名程度。会長 村瀬憲夫(近大名誉教授)、副会長(佐々

木政一、馬場吉久、唐津麻貴子)。他中心的メンバーが10名ほど。

・具体的活動

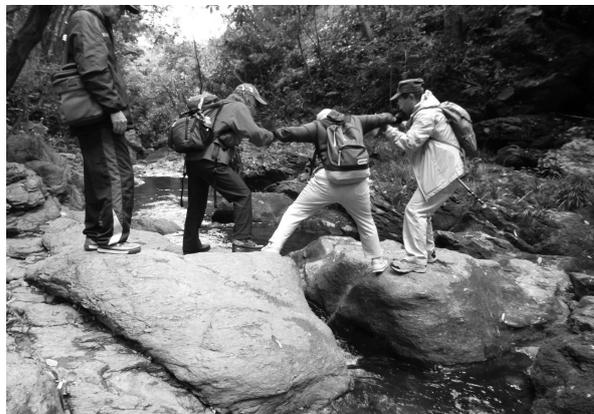
【紀伊万葉ウォーク】

紀の国の万葉故地を巡り、万葉歌が詠われた景観を楽しみながら、万葉の時代を偲び、万葉時代のミヤコビトの感動を遡って追体験し万葉に親しむ。

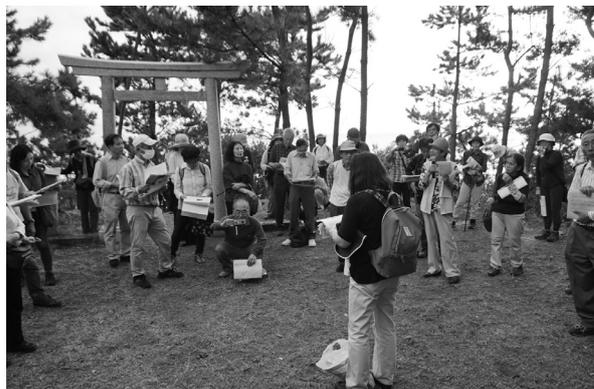
第1回をかつらぎ町で背山・妹山をメインのウォークを実施し、その後ほぼ年に1回和歌山県内の万葉故地を選び1泊2日のコースを設定、第1日の夜は交流会を開催する。

この間、紀和国境の橋本市から、かつらぎ町、和歌山市、海南、有田、…白浜、新宮と順不同ながら県内の主な万葉故地巡りはほぼ完遂となり、昨年は日本遺産となった和歌浦・雑賀崎を再訪問しています。

参加者は和歌山県内に止まらず、大阪、奈良などの近畿府県さらに、九州・四国、関東、北



紀和国境の川(落合川)の「飛び越え石」を超える



岩代王子にて

陸等文字通り全国から集まってきます。初日の夜は「万葉交流会」での懇親と情報交換が活発に行われます。

ただ、一泊行事では運営が大変で、去年はウォークを日帰りとし、遠方から前泊で参加する方と当会メンバー有志での前夜交流会を実施するという方式となりました。

【万葉玉手箱】

万葉ウォークのみでなく、内容も参加者も幅広く多面的に楽しもう、と考えて新たな事業を起こしました。(平成27年5月)その名称も「万葉玉手箱」とし、何が出るかもお楽しみとの気持ちが込められています。

当初は村瀬会長の「紀伊万葉 1首を鑑賞」のシリーズ講演と当グループ会員が万葉集に掛かる「想い」や自らの調査事項などを発表し、参加者と懇談する形から始まりました。

その後「部屋から外に出よう」と和歌山城で万葉植物を探して万葉歌を楽しむという、フィールドワークや、万葉かるた取り、「ディープな和歌浦散策」など“楽しめるイベント”を実施。継続的に参加してくれる方、新たに万葉集に興味を持ち始めた方など幅が広がりました。また万葉玉手箱は外部講師ではなくメンバー自らが参加者に対して発表することでメンバー同士の勉強会としても機能しています。

去年はさらに、万葉集にも関係ある箏の話題を中心に、箏や尺八の演奏に、万葉歌などの朗誦・歌唱を加え、「万葉集で楽しむ和の音楽」と題する音楽会を催し好評でした。



万葉集で楽しむ和の音楽

万葉玉手箱は万葉集やその時代の歴史・文化を気軽に楽しめる企画として、万葉ファンの底辺拡大の効果を上げています

【バレンタインに贈る短歌（募集と表彰）】

“あなたにとどけ！ワタシの想い ボクもとどけよう！君への想い”を標語に、万葉集とは直接関係はありませんが、中高生を対象に短歌作りを通して古典や万葉集に親しむ心を養えたら良いなということで始めた行事です。バレンタインデーを機に、誰かに愛や感謝の気持ちを三十一文字で伝えてみよう和学校ごとに募集案内を送り、生徒さんの作品を提出してもらっています。去年が3年目ですが、7中学校734作品、3高等学校338作品、合計1,072作品の応募を得ました。表彰名は、「額田王賞、柿本人麻呂賞、山部赤人賞」と万葉歌人に因んだ賞となっています。昨年度の表彰作品を紙面の都合で一部だけ紹介します。

- 中学の部 額田王賞
チョコレート 溶かして固めて 出来上がり
わたし決心 まだ固まらず
- 中学の部 柿本人麻呂賞
「またあした」背中にかくした チョコレート
わたせない距離 五億光年
- 高校の部 柿本人麻呂賞
家族へと なかなか言えない 言葉ある
たった5音の 「ありがとう」

【万葉衣装 de 和歌の浦】

万葉衣装（古代衣装：写真参照）を着て、万葉人の気分で和歌浦を散策してみよう、ということで当初は当グループ内の「和歌の浦まちなびの会」のメンバーが企画し、始まった事業です。きらびやかな衣装に身を包むと、万葉時代の貴族・女官の気分となれます。

終わりに

以上、紀の国の万葉歌の紹介と紀伊万葉ネットワークについて書いてきました。



万葉衣装を着ての集合記念写真

万葉集の素晴らしさ、その万葉集に詠われた紀の国の素晴らしさを多くの人と感動を共にしたい、お互いに万葉集のことをもっと知りたい、と今後も地道に活動を続けていきます。「令和」で脚光を浴びた万葉集のブームが一過性で終わらぬことを願いながら。

参考文献

万葉集（一）～（四）

中西 進 講談社文庫

和歌の浦の誕生 ―古典文学と玉津島社―

清文堂

万葉びとのまなざし

村瀬憲夫 はなわ新書

紀伊国万葉歌碑散歩

佐々木政一 新和歌山新報社

紀伊万葉ガイドブック

和歌山県

(<http://www.katsuragi-kanko.jp/K/kiimanyogaido.pdf>)

万葉二千三百碑

田村泰秀／富田敏子 万葉の大和路を歩く会